

楊家將物語と『水滸傳』：
「破天陣」と「九宮八卦陣」の比較を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科： 都市文化研究センター 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 楊家將, 水滸傳, 破天陣, 九宮八卦陣, 対遼戦争 キーワード (En): Story of the Generals of the Yang 楊 Family, Shuihuzhuan 水滸傳, Potianzhen 破天陣, Jiugongbaguazhen 九宮八卦陣, The war against the Liao 遼 dynasty 作成者: 田淵, 欣也 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-041

楊家将物語と『水滸傳』

—— 「破天陣」と「九宮八卦陣」の比較を中心として ——

田 淵 欣 也

◆要 旨

中国の古典小説は、その構成や人物形成などにおいて、作品間でしばしば影響関係が見られる。このことは、楊家将物語も例外ではない。

楊家将物語と対比して語られることの多い作品としては、『水滸傳』が挙げられる。本稿は、先行研究についてまとめた上で、楊家将ものの雑劇と『水滸傳』ものの雑劇（水滸戯）の中で、対遼戦争と特殊な陣という同じモチーフを用いた作品を取り上げて比較検討を行うものである。

まず楊家将物語と『水滸傳』との関わりについて述べられた先行研究についてまとめ、分析と補足を試みた。その中では、総じて北宋と遼の対立が、一つの欠くべからざる要素となっていると言える。

続いて、楊家将ものの雑劇「破天陣」と水滸戯「九宮八卦陣」とを取り上げて、比較検討を行った。これらは共に、対遼戦争において特殊な陣が布かれるという要素を持っているが、布陣の内容にはそれぞれ差がある。また、「破天陣」では敵の遼軍が陣を布いているのに対し、「九宮八卦陣」は梁山泊軍が自ら陣を布いており、自軍と敵軍陣のどちらが陣を布いているかという点でも異なっている。「九宮八卦陣」の方が、観衆に向けて自軍の強さをよりアピールすることができる形になっているのである。

更に、「破天陣」は戦闘の場面において同じことを繰り返しているに過ぎないのに対し、「九宮八卦陣」では一度の戦闘で勝敗が決する。このことから、「九宮八卦陣」が冗漫な繰り返しを避け、一段の流れで演じ切ることによって、より合理的に観衆にアピールできる形となっていることが指摘できる。

キーワード：楊家将、水滸傳、破天陣、九宮八卦陣、対遼戦争

(2014年9月5日論文受付, 2014年11月7日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

はじめに

中国の古典小説は、その構成や人物形成などにおいて、作品間でしばしば影響関係が見られる。それらは宋代の盛り場で競い合って語られ、発展してきた語り物を起源としているため、互いに影響関係があるのも当然といえる。

このことは、中国でよく知られている楊家将にまつわる物語も例外ではない。例えば金文京氏は、「秦淮墨客、紀振倫編の『楊家府演義志傳』(万曆三十四年刊)で、太行山にたてこもった楊家の当主、楊繼業が、宋の太祖に降伏するに際し三つの条件を出したのは、關羽が曹操に降るにあたり三つ条件をのませた話を借用したものであろう」として、楊家将物語と『三國志演義』の関わり

を指摘している¹⁾。しかし、とりわけ楊家将物語と対比して語られることの多い作品としては、『水滸傳』が挙げられよう。

本稿では、まず楊家将物語と『水滸傳』の関わりについて述べた先行研究についてまとめ、それから楊家将ものの雑劇と『水滸傳』ものの雑劇（水滸戯）の中で、対遼戦争と特殊な陣という同じモチーフを用いた作品を取り上げて比較検討を行う。

1. 先行研究について

管見の限りでは、楊家将物語と『水滸傳』の関わりに

ついて最も詳細かつ多岐に渡り述べられているものは、中鉢雅量「楊家将演義と水滸傳」（『中国小説史研究—水滸傳を中心として—』〔汲古書院、一九九六年〕Ⅱの第三章）である。まず中鉢氏は、『楊家将』²⁾と『水滸傳』に見える類似点について、第一に君側の奸臣と戦わねばならなかった点、第二に緑林英雄や地方の勢力家を味方に引き入れるよう努めた点、第三に北方の遼と対峙する北宋時代を背景とする点、第四に主として山西、河北、河南を活躍の舞台とする点を挙げる。

中鉢氏は続いて、『水滸傳』の征遼の段が楊家将物語の影響を受けて成立したことを論じる。一つ目は、遼軍が宋軍を谷地に誘い込む場面についてである。『水滸傳』第八十六回において、遼の賀重寶は盧俊義の一隊を青石峪に誘い込むが、『楊家将』にも、第十八回において楊業が陳家谷で孤立する場面、第二十五回において楊六郎が雙龍谷に誘い込まれる場面、第四十回において八王と宋の十大朝官が九龍飛虎谷で包囲される場面がある。そして、『楊家将』第十八回の場面は元代には成立しており、明代以降に附加された『水滸傳』の征遼の段より前であることは明らかであるとし、第二十五回と第四十回の場面についても、『水滸傳』の征遼の段より先に案出された可能性は大きいとする。

二つ目は、『水滸傳』の混天陣と『楊家将』の天門陣の相似についてである。混天陣は『水滸傳』第八十八回で遼の兀顔光が、天門陣は『楊家将』第三十三回で遼の呂軍師がそれぞれ布く陣であり、軍士達の持つ何種類かの兵器が天の四神の各部を象徴的に表現する点で同一であると述べる。また、これらの陣を破るに際しては、『水滸傳』では宋江が夢の中で九天玄女から陣を破る方法を授かり、『楊家将』では楊宗保が擎天聖母から兵書を与えられ、更に鍾離權の化身である鍾道士から策を授かっている。そして両書共にこの戦いによって両軍の勝敗は決し、遼は急速に滅亡へと向かう。このように、両書は布陣の類似のみならず、陣を破る方法の授かり方や、その後の事態の推移などにも共通する点が少なくないとする。

そしてこの場合でも、『楊家将』のこの段が先に成立し、『水滸傳』はそれを下敷きにしたと推定する。「謝金吾」第三折の【幺篇】に「你道是楊和尚破天陣吃了些虧，卻不道救銅臺是靠着伊誰（お前は楊和尚が天陣を破る時にしくじったと言うが、銅臺を救ったのはそもそも誰のおかげかを言わぬ）」とあることから、元代の楊家将説話・話本に天門陣を破る一段があったとし、また『楊家府』や「破天陣」雜劇にもこの一段が描かれていることから、その定着度の高さを推測している。そして、『楊家将』のこの段が、倉卒に書かれた印象を抱かせる『水滸傳』の征遼の段を下敷きにしたとは考え難く、実際にはその逆であったらうとする。

以上、遼軍が相手の兵を谷の中に誘い込む計略及び、『水滸傳』の混天陣と『楊家将』の天門陣の類似という二点に基づき、『水滸傳』の征遼の段全体がほぼ『楊家将』もしくはその前身たる楊家将説話・話本を下敷きにして作られたと推定している。この後、補足として、『水滸傳』の征遼戦で呼延灼が活躍するのは、『楊家将』における呼延贊の活躍に影響された結果であると述べる。

中鉢氏の説は、筋が通っていると思われる。楊家将の物語が成立する過程にあつては、そもそもモデルとなった楊業や楊延昭が遼との国境防衛に活躍した人物であり、対遼戦争は切り離すことのできないものであった。一方、『水滸傳』の場合は、好漢達の最期を描く方臘討伐が不可分とされていたのに対し、征遼故事は前後から隔絶した話のように捉えられており、田虎討伐や王慶討伐と同様に後から挿増されたものだとする説まで唱えられていた³⁾。現在のところ、梁山泊軍が征遼故事で勝利することと、方臘討伐で崩壊することをセットとする宮崎市定氏の説⁴⁾に最も道理があると思われるが、その二つの戦争をセットとする構想は、恐らく『水滸傳』成立のほぼ最終段階で生まれたはずである。だとすれば、『水滸傳』の征遼故事が作られる際に、それ以前から広く知られていた楊家将の物語を下敷きとすることは十分にあり得ることである。

次に、佐竹靖彦『梁山泊—水滸傳・108人の豪傑たち』（中央公論社、一九九二年）第七章中の「対契丹戦の英雄楊業と楊家将故事」で説かれていることを見ていこう。佐竹氏は楊家将故事を、「水滸傳における遼国遠征という荒唐無稽の物語のいわば火種」と見ている。そしてまず、『水滸傳』の青面獸・楊志が楊令公の子孫と称していることに触れ、それと関連付けて、北宋末の金軍の華北侵入に抗した山東の盗賊である白氈笠・劉忠という者が、自らその額に刺青をしていたために花面獸とも呼ばれていたと述べる。青面獸の「青」は顔の痣と説明されているが、「青」は一般に刺青を指すことから、青面獸と花面獸は同義であったとし、顔に刺青するのは罪人の印であり、名誉ある楊家将の子孫とされた青面獸・楊志にはふさわしくないため、本来の刺青を痣にすり替えて説明したと推測している⁵⁾。

続いて佐竹氏は、『清平山堂話本』に見える「楊温攔路虎傳」について、主人公の楊温が楊令公の子孫である楊重立の息子とされていることを紹介する。そして、「攔路虎」の楊温が東岳泰山に奉納する棒の試合で李貴を倒す場面と、『水滸傳』第七十四回の燕青が東岳泰山に奉納する相撲の試合で任原を倒す場面の類似を始めとして、「攔路虎」の多くの箇所が『水滸傳』と一致している。

先に「攔路虎」について述べるならば、確かに楊温は楊令公の後裔という設定にされているが、楊温や楊重立

という名は現在知られている楊家将の物語には見えない。従って、「攔路虎」を楊家将ものの話として扱うことにはためらいを禁じ得ない。「攔路虎」と『水滸傳』の筋書きによく似た部分があることは間違いないものの、これによって楊家将故事が『水滸傳』に与えた影響であると主張するのはふさわしくないであろう。

楊志と劉忠に関する論も、楊家将物語との直接の関わりはないように思える。ただし、敢えて附言するならば、楊六郎の配下の一人である岳勝の綽名も花面獸というのである⁶⁾。岳勝を始めとして、孟良や焦贊など、楊六郎の配下に加わる豪傑たちはいずれも架空のキャラクターであるが、その人物造形には当時実在した民間武装集団の姿が投影されていたと思われる⁷⁾。楊志と岳勝が共に劉忠をモデルとしている可能性は十分にある。

最後に、間接的な言及ではあるが、西川芳樹「元代の歴史劇に於ける忠臣と奸臣の対立関係―「趙氏孤兒」劇、「伍員吹簫」劇を手がかりとして―」（『関西大学中国文学会紀要』第三十三号、二〇一二年）で述べられていることについて見てみたい。

西川氏は、まず「趙氏孤兒」と「伍員吹簫」を例として、本来は君臣の対立を描いていた話が、元代に為政者を悪く描くことが取り締まられるようになると、主君の悪事に関わる部分を削除し、奸臣を新たに敵役に配置して主君の代わりとするようになったことを論ずる。そして、この「主君を利用した、忠正賢良と奸邪の対立」は明以降の歴史を題材とした多数の白話文学作品に採用されているとし、例として、『楊家府』の楊六郎・王欽若・太宗の関係、『説岳全傳』の岳飛・秦檜・高宗の関係、『水滸傳』の好漢・高俅たち奸臣・徽宗の関係を挙げる。また、これらの作品の主人公は、その大半が外征をして異民族と戦う軍官であり、内は奸臣、外は外敵と戦う内憂外患の状況に置かれ、外敵という新たな要素が加わると指摘している。

この指摘は、中鉢氏が最初に挙げた『楊家將』と『水滸傳』に見える四つの類似点とも重なるものである。私見を述べるならば、上述されるような明以降の作品における主君はもはや悪役とはなり得ず、むしろ忠臣たる主人公に対して好意的であったり協力的であったりする。しかし、それは何ら実行力を伴わないものであり、また主君も結局は奸臣の意のままであるため、主人公は主君から守られることなく、奸臣の攻撃を受け続けることとなる。戦闘の場面になると主君の存在感は更に希薄になり、主人公は奸臣と異民族国家を相手に苦闘する。明以降の作品においては、物語が進行する軸はやはり内憂外患へと移っているのである。

以上、先行研究の内のごく限られたものについて見てきた。楊家将物語と『水滸傳』に共通する要素は少なくないが、両者が北宋と遼の対立していた時期を舞台とし

ている点は特に重要であろう。対遼戦争に活躍した楊業を始祖とする楊家将物語において、北宋と遼の対立は、物語の発生段階から既に不可分なものとして存在しており、戦争や奸臣との対立などは、いずれも遼との関係を軸とするものである。一方『水滸傳』では、物語成立のほぼ最終段階になって、梁山泊軍が崩壊する方臘討伐との対比として華々しい征遼故事を設けており、そこでは楊家将物語が下敷きとして用いられていた。その扱いに差異はあるものの、楊家将物語にせよ『水滸傳』にせよ、総じて北宋と遼の対立が一つの欠くべからざる要素となっていると言えよう。

2. 楊家将雜劇と水滸戲の比較

(1) 「破天陣」

先の中鉢氏は、主に小説に基づいて『水滸傳』の混天陣と『楊家將』の天門陣の相似を指摘されたが、雜劇においても、楊家将ものの雜劇と水滸戲とにおいて、それぞれ特殊な陣を布くというモチーフを用いた作品が存在している。ここでは両者を対比し、どのような相似または相違が存在するのかを見ていきたい。

まずは楊家将雜劇からである。「破天陣」劇⁸⁾は、趙琦美による『脈望館鈔校本古今雜劇』（万曆四十～四十五年〔一六一二～一六一七〕校定）に内府本として収められている無名氏の作品である。寇準のいる銅臺城が遼軍に包囲されたため、謝金吾殺しの一件で身を隠していた楊景が召し出され、遼軍を破って危機を救う。この際、遼の軍師である顔洞賓が、一百四十二の陣を組み合わせたという特殊な陣を布くのである。この作品においては、呂洞賓の化身と思われる顔洞賓⁹⁾の存在や、全真教の指導者や八仙に言及されるなど、道教的色合いが濃く見られる¹⁰⁾。

“話を終えて天に昇ろうと

私は青雲に乗って帰る

そなたは私の仙郷がどこか尋ねるが

話せば驚いて魂も飛び去る

花を植えるのはわずかの間

韓湘子と私は親戚関係

王祖師は私の叔父

馬丹陽は私のお隣さん

張四郎は釣った魚を私に食わせ

張果老は私の祖父

私は藍采和の体につくノミ

漢鍾離の足に止まるヌカガ¹¹⁾”〈第一折、顔洞賓の退場詩〉

このような道教的要素は顔洞賓が布く陣にも深く反映されており、その陣を楊景らが打ち破る場面が「破天陣」の主眼となっている。第一折において、顔洞賓は布陣について次のように説明する。

この天陣の中には一つの天陣だけでなく、東西南北になぞらえ、前に朱雀、後ろに玄武、左に青龍、右に白虎があります。この四つの陣の外に、乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌の八卦陣を布きます。この八卦陣は、休・生・傷・度・景・死・驚・開の八門陣になぞらえます。この八門陣の外に、また二十八陣があり、角・亢・氏・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昴・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫の二十八宿になぞらえます。…〔中略〕…正名を周天二十八宿陣といい、集まれば一つになり、散開すればその数は、全部で百四十二陣となります¹²⁾。

この部分の顔洞賓の白は非常に長尺であり、実際に舞台で演じられた際には、顔洞賓に扮する役者にとって腕の見せどころとなっていたと思われる。「破天陣」で顔洞賓に扮するのは浄であるが、もし彼がこの長尺の白をよどみなく一息で言い切ったならば、観衆は拍手喝采を贈ったことであろう。

ここで挙げられている陣の名称を、煩を厭わず書き出してみると、朱雀陣、玄武陣、青龍陣、白虎陣、八卦陣（乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌）、八門陣（休・生・傷・度・景・死・驚・開）、二十八宿陣（角・亢・氏・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昴・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫）、參辰陣、十二宮辰陣（宝瓶宮・人馬宮・磨羯宮・天蝎宮・天秤宮・双女宮・獅子宮・巨蟹宮・金牛宮・白羊宮・双鱼宮・陰陽宮）、十二時陣（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）、九曜陣（羅喉・土星・金星・水星・太陽・火星・計都・太陰・木星）、四斗陣（東斗十三星・西斗十四星・南斗六星・北斗七星）、金・木・水・火・土の五陣、天河陣、黄河九曲陣、二暗陣（羅喉・計都）、北斗玄武七星陣、天関地軸陣、太陽朝闕陣、太陰元鉄陣となる。ただし、いずれが正式名称か別名かを判断し難いものがあり、またそれぞれの陣の対応関係ははっきりとしない部分もある。ともあれ、顔洞賓が布く周天二十八宿陣とは、多種多様な陣が複雑に組み合わせられて構成されているものであることがわかる。

ところが、第二折になるとこの陣は周天八卦陣という名で呼ばれ、第三折で顔洞賓が定めた諸将の配置は次のようなものであった。

青龍陣…都骨林

白虎陣…土金宿
朱雀陣…蕭天佑
玄武陣…蕭天佑
天門陣…忽里歹
九曲黄河陣…耶律灰
日精月華陣…蕭虎・蕭彪
二十八宿陣…韓延壽・顔洞賓

まず目に付くのは、多くの陣が抹消され、布陣が簡略化されていることであろう。また実際に配置された陣についても、日精月華陣などはここで初めて名が見えるものである。このような簡略化や名称の違い、すなわち前後の記述の不一致は、どのような理由から生じたのであろうか。

恐らくこれは、実際に上演されたものが設定と異なっていたことを示唆するものではないだろうか。先述したように「破天陣」は『脈望館鈔校本古今雜劇』の内府本に属するものであり、つまり明代の宮廷で行われていた演劇の上演用台本に基づいている。そもそも、「破天陣」のように多くの役者が登場して舞台上で入り乱れる作品は、民間の劇団程度の規模ではとても上演できるものではなく、宮廷劇団の規模をして初めて上演が可能となるのである。しかしながら、第一折で顔洞賓が語るような多種多様な陣の全てを再現することは宮廷劇団であろうとも不可能であったため、あくまで設定としてはそのまま残しておき、実際に上演する際には布陣を簡略化したのであろう。或いは、何か非常に喜ばしい出来事や行事に関連して上演された場合には、顔洞賓が語る陣を全て再現した特別公演が行われたということがあったのかもしれない。いずれにせよ、「破天陣」にとって陣を布く場面は、必ず演じられなければならない不可欠の要素であることは確かであろう。

ついでながらここで、同じく楊家将雜劇である「活拿蕭天佑」劇¹³⁾について述べておきたい。「活拿蕭天佑」も、やはり『脈望館鈔校本古今雜劇』に無名氏の作品として収められている。内容としては、遼の韓延壽から武芸比べを申し入れられた八大王が、三関を鎮守する楊景に出陣を命じ、楊景は孟良や焦贊らを率いて遼軍を撃退するという単純なものであるが、話の構造としては「破天陣」と重なるものがある。すなわち、「破天陣」から布陣という要素を取り去ったならば、「活拿蕭天佑」のような話になると思われるのである。

実際に「破天陣」を簡略化、ないしはもう一つのバリエーションとして作られたものが「活拿蕭天佑」であったのか、逆に「活拿蕭天佑」という単純な話を発展させて「破天陣」が作られたのかを確かめる術はない。一方で、両陣営の人物が自己紹介をした後に戦闘を行うという構成を組み込んだ雜劇は、「薛仁貴」や「三戦呂布」

など、少なからず存在している。これは各作品の間に影響関係があるというよりも、叙述において一定のパターンができあがっていて、このような構成がある種テンプレート化していたことを窺わせるものである。むしろ「破天陣」と「活拿蕭天佑」も、同様の構成を用いながら、それぞれ独自に作られたものと考えるのが自然であるかもしれない。当時実際に演じていた劇団側の立場で想像するに、テンプレートとなる作品の一つ用意しておき、上演する際には観衆側の要望に合わせてそれに手を加えるようにしていたならば、都合が良かったのではないだろうか。

(2)「九宮八卦陣」

続いて水滸戯に話を移す前に、『水滸傳』成書までの流れを大まかにまとめておく。

まず北宋、徽宗の宣和年間（一一一九～一一二五）に、宋江ら三十六人の盜賊が、山東や淮南の辺りを荒らし回った後、官軍に鎮圧されて降伏したことが、『宋史』などの史書に見える。宋江の乱は、北宋の末から南宋にかけて、民衆の間で語り継がれていくうちに話がふくらんでいったようであり、南宋の龔開、字は聖與による「宋江三十六人贊」が残されている。また宋末元初の羅輝が著した、南宋の状況を伝える『醉翁談録』に、楊志、魯智深、武松らにまつわる講釈の作品名が記されており、元代の成立とされる『大宋宣和遺事』には、『水滸傳』の雛形となった物語が見える。そして金代末期頃から発達したとされる雜劇においても、『水滸傳』ものは重要な題材の一つとされ、現在の『水滸傳』とは必ずしも内容が一致しないものの、李逵や燕青などを主人公とした作品が作られることとなった。

このように、元来は各々の好漢にまつわる物語が語られていた。これらが繋ぎ合わされて現在の『水滸傳』の形にまとめられたのは、元末明初と考えられている。『水滸傳』が初めて刊行されたのは、明の嘉靖年間（一五二二～一五六六）とされ、その嘉靖本の残葉といわれるものも存在しているが、現在見ることのできる最古の完全なテキストは、万暦年間（一五七三～一六二〇）に杭州の容與堂が刊行したものである。

それでは、水滸戯の一つである「九宮八卦陣」劇¹⁴⁾について見ていきたい。「九宮八卦陣」も『脈望館鈔校本古今雜劇』の内府本であり、その大筋は、『水滸傳』第八十七回で描かれている、遼の兀顔延壽、太眞胥慶、李集が幽州にいる宋江らに戦いを挑むのを、宋江が九宮八卦陣を布いて打ち破る場面と同じである。ここから、『水滸傳』と「九宮八卦陣」の前後関係が問題となるが、これに関しては、「九宮八卦陣」において、『水滸傳』という天罡星三十六人に属する好漢に加え、地煞星七十二人に属する好漢が多数登場している点が重要である。

実在した宋江を首領とする三十六人に関する詳細は不明であるが、「宋江三十六人贊」以降はある程度メンバーが固定され、『水滸傳』の天罡星三十六人に引き継がれた。一方で地煞星七十二人については、元代の雜劇の段階で「三十六大夥、七十二小夥（三十六人の大頭目と七十二人の小頭目）」という表現が散見されるものの、具体的なメンバーについては言及されておらず、それが設定されるのは『水滸傳』の段階になってからである。これ以外に、登場人物の発言の端々からも『水滸傳』を踏まえていることが窺われ、「九宮八卦陣」の完成が『水滸傳』成書後であったことは明らかである。従って、恐らく「九宮八卦陣」は、『水滸傳』第八十七回を参考にして作られた作品と考えられる。

この「九宮八卦陣」にも、特殊な陣を布くというモチーフが見られる。第二折において、遼の兀顔受、李金吾、戴眞慶と戦うことになった宋江らは、公孫勝の師である羅眞人を訪ね、遼の軍に勝つために策を求める。そこで羅眞人は、宋江には九宮八卦陣という陣を伝授し、公孫勝にはその陣を変化させる秘法を伝授する。

羅眞人 宋將軍よ、李逵は行ってしまいました。あなたにお話ししますが、明日は兀顔受がきっとやって来ますので、私があなたに一つの陣を伝授しましょう。この陣はあなたが知るべきものですのに、私が伝授しないままになっていました。その名は九宮八卦陣。九宮の上に九人の大將を置き、八卦の上に八人の英雄を置くのです。公孫勝よ、私には他に秘法があり、お前達はこの陣を変化させる法を伝授しよう。將軍、こちらへ来られよ。（耳元でささやくしぐさをする¹⁵⁾）

また第三折では、九宮八卦陣について次のように語られる。

宋江 朱武軍師、これから將軍達を集め、一つの陣を布いて、遼の兵を打ち破るぞ。軍師よ、そなたに尋ねるが、九宮八卦陣の布陣はどのようになっているのか。

朱武 兄者この陣は素晴らしく、九宮は九九八十一宮に分かれ、八卦は八八六十四卦に分かれています。

公孫勝 軍師の言う通りです。この陣には変化の法もあり、天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇といい、遼の兵を破ることができます¹⁶⁾。

この後、諸將が呼び集められてそれぞれの配置を言い渡される。最終的に定められた諸將の配置は次の通りである（なお、名前の表記が『水滸傳』と異なる者がいる

が、「九宮八卦陣」における表記のままにしておく。

坎…韓滔
 艮…彭起
 震…朱仝
 巽…索超
 離…雷横
 坤…秦明
 乾…李逵
 兌…楊志（以上、八卦陣）
 天蝸宮・天称宮…杜千・宋萬
 巨獬宮・獅子宮…解珍・解寶
 白羊宮・人馬宮…薛永・施恩
 双魚宮・双女宮…鄭天壽・王矮虎
 宝瓶宮…陳達（以上、九宮陣）

九宮については、陳達の宝瓶宮を除き、二人の者が同時に呼ばれて二つの宮を守るように命じられるという描写になっているので、どちらがどちらの宮を守っているのかははっきりしない。

この九宮八卦陣が『水滸傳』第八十七回で用いられていることは既に述べたが、実は第七十六回における童貫との戦いでも用いられており、ここで詳しい布陣が語られている。

南方丙丁…秦明
 東方甲乙…關勝
 西方庚辛…林冲
 北方壬癸…呼延灼
 巽…董平
 坤…索超
 艮…史進
 乾…楊志
 中央戊己…朱仝・雷横

「九宮八卦陣」と『水滸傳』の布陣を比較すると、「九宮八卦陣」では『水滸傳』にない九宮の要素が加えられているものの、八卦の方位に各将を配置するという考えは共通のものである¹⁷⁾。しかし「破天陣」と「九宮八卦陣」の布陣を比較した場合、共通性はそれほど感じられない。「破天陣」第一折で顔洞賓が語る中には八卦や十二宮辰が含まれているが、それらは第二折での布陣には見えないのである。「破天陣」と「九宮八卦陣」は、共に対遼戦争と特殊な陣という取り合わせを採用している。これは恐らく、北宋対遼という一大決戦をより見応えのあるものとするために、特殊な陣を布くという演出が取り入れられたのであろう。ただし、具体的な布陣に関しては互いに干渉をしなかったということになる。

更に注目したいのは、特殊な陣を布くのが自軍であるか、敵軍であるかという違いである。すなわち、「破天陣」では敵の遼軍が周天八卦陣を布いているのに対し、「九宮八卦陣」は梁山泊軍が自ら陣を布いている点である。特に「九宮八卦陣」については、先の中鉢氏の指摘にもあったように、『水滸傳』では遼軍も混天陣という陣を用いているにも関わらず、それを削った上で梁山泊軍にのみ陣を布かせている。これは一体どのような理由によるものなのであろうか。

まず「破天陣」では、遼軍の陣を楊景らの軍が打ち破るのであるから、強大な力を持つ敵軍を自軍が倒すという形になる。それに対して「九宮八卦陣」では、梁山泊軍が陣を布いて遼軍を打ち破るのであるから、自軍が持つ強大な力で敵軍を完膚無きまでに叩きのめすという形になっている。両者を比較した場合、観衆に向けて自軍の強さをよりアピールすることができるのは、「九宮八卦陣」の方であろう。確かに「破天陣」の形でも、強大な力を持つ敵を倒すことで、結果として自軍はそれを上回る力を備えていることの証明となるのであるが、その理屈を舞台上で表現することは難しく、観衆の頭の中で理解してもらうしかない。「九宮八卦陣」のように自軍が強大な力を持つという設定にしておいて、一気呵成に敵軍を倒してしまえば、自軍の強さは誰の目にも明らかとなる。

両者における戦闘の場面を見てみよう。「破天陣」では、遼の諸将が布く様々な陣をそれぞれ個別に撃破していくという戦略が用いられている。最初に楊宗保が天門陣を破る様子は次の通りである。

顔洞賓 忽里歹よ、しっかりと陣を布き、あやつに
 我が陣を攻めてみさせるのだ。
 忽里歹 承知しました。（陣を布くしぐさをする）
 楊景（唱う）

【快活三】

“猛々しく門の旗の前で話をし
 がやがやと陣中で鬨の声を上げる
 ドンドンと天に響き耳にやかましい戦いの銅鑼
 が響き
 ガラガラと殺気をかき立てて出撃の合図の砲を
 撃つ”

楊宗保よあの天門陣を攻めよ。

楊宗保 承知しました。（陣を攻めるしぐさをする）
 天門陣を破ったぞ。
 韓延壽 軍師よ、天門陣が破られてしまったぞ。
 顔洞賓 大丈夫、まだ二十八宿陣がありますから。
 青龍白虎陣を布け¹⁸⁾。〈第三折〉

以下、岳勝と孟良が青龍陣と白虎陣を、李瑜と焦贊が

朱雀陣と玄武陣を、張蓋と呼延必顯が黄河九曲陣と日精月華陣を破り、最後に楊景を含め全員で二十八宿陣を破るという流れになっているが、いずれも描写は似通っており、同じ事の繰り返しに過ぎない。陣を攻めている最中の動きについては、ト書きで簡単に記されているだけなので、具体的なことはわからない。しかし、いかに派手な大立ち回りを演じて見せたところで、それが何度も繰り返されるのでは新鮮味が薄れ、観衆も食傷気味とならざるを得まい。

一方、「九宮八卦陣」における戦闘の場面は、次のようになっている。

兀顔受 お前達二人は左右から攻め、私我先陣となろう。

李金吾 元帥、突撃しましょう。

(兀顔受・李金吾・戴眞慶が陣に入るしぐさをする)

(公孫勝が旗を揺らすしぐさをする)

(李逵が大勢と共に三人を取り囲むしぐさをする)

兀顔受 一体どうして方角がわからなくなったのだ。

どこへ出れば良いのだろう。

李逵 兄弟達よ、あやつらを逃がすな。(唱う)

【仙呂・賞花時】

“今や出会い頭にひたすら戦い

見ればあやつらはあちこち慌てふためいて行き場もない

お前は我らの勇猛な兵に敵わず

今日この地で死に

この陣は多くの者を驚かせる”

兀顔受 これはまずい、隙間を目がけて逃げろや逃げろ。(退場)

(大勢が賊の戴眞慶・李金吾を捕らえるしぐさをする¹⁹⁾)〈楔子〉

こちらでは一度の戦闘で勝敗が決するため、この記述を読むだけでは、却って物足りない観衆に思われる恐れもあろう。しかし、この場面は「九宮八卦陣」のクライマックスとなるものであり、立ち回りには特に力が注がれていたはずである。梁山泊軍が遼軍を取り囲む様子や、戴眞慶と李金吾を捕らえる様子などを、立ち回りを挟みながら丹念に演じ、クライマックスの一段として提示したならば、観衆を十分に満足させることは可能であったと考えられる。むしろ冗漫に繰り返すことをせず、一段の流れで演じ切ることによって、より印象に残るものとなったのではないか。

既に述べたように、対遼戦争の要素は、楊家将物語が作られ始めた当初から不可分のものであったのに対し、『水滸傳』ではかなり後の段階で取り入れられた。そして、「九宮八卦陣」は明らかに『水滸傳』成書後に作ら

れた作品である。これらを踏まえると、先後関係としては先に「破天陣」が作られ、その後に「九宮八卦陣」が作られたことになろう。「九宮八卦陣」が実際に「破天陣」を参照しながら作られたと断定することはできないが、「九宮八卦陣」がマンネリズムに陥ることを避けつつ、より合理的に観衆にアピールできる形となっていることは確かである。

おわりに

本稿では、まず楊家将物語と『水滸傳』との関わりについて述べられた先行研究を挙げ、分析といくばくかの補足を試みた。これを通じて、北宋と遼の対立が、一つの欠くべからざる要素となっていることを確認した。

続いて、楊家将ものの雑劇「破天陣」と水滸戯「九宮八卦陣」を比較検討したが、共に対遼戦争において特殊な陣が布かれるという要素を持ちながら、布陣の内容には大きな差が見られる。また、「破天陣」では敵の遼軍が陣を布いているのに対し、「九宮八卦陣」は梁山泊軍が自ら陣を布いており、自軍と敵軍陣のどちらが陣を布いているかという点でも異なっている。これにより、「九宮八卦陣」の方が観衆に向けて自軍の強さをよりアピールすることができる形になっている。

更に、「破天陣」は戦闘の場面において同じことを繰り返しているに過ぎないのに対し、「九宮八卦陣」では一度の戦闘で勝敗が決する。このことから、「九宮八卦陣」が冗漫な繰り返しを避け、一段の流れで演じ切ることによって、より合理的に観衆にアピールできる形となっていることを指摘した。

「破天陣」と「九宮八卦陣」を比較し、類似する部分と異なる部分について考察していく中で、「九宮八卦陣」の成立がやや遅れるためか異なる部分の方が目立つような印象となったが、それはそれで意味のあることと考える。物語間の影響関係を考えようとすると、とかく似通っている部分にばかり意識が向かいがちになるが、類似点を踏まえた上でどのような違いがあり、どのように差別化が図られているかを見出すことが重要だからである。

物語間の影響関係を論ずることは容易ではないが、今後は『水滸傳』のみならず他の作品へも視野を広げ、楊家将物語との関わりについて考えていきたい。また本稿で主に取り上げたのは小説と雑劇であったが、楊家将を題材とした演劇は、京劇や地方劇、民間芸能、宮廷演劇などにも多数存在しており、これらに対しても研究を進めていきたい。

注

1. 金文京『三國志演義の世界（増補版）』（東方書店、二〇一〇年）一五一頁より。なお、ここで述べられている『楊家府演義志伝』は、全称を『楊家府世代忠勇通俗演義志傳』（以下『楊家府』と略す）といい、全八巻五十八則から成る。楊繼業のエピソードは『楊家府』第一巻第五則、關羽のエピソードは『三國志演義』第二十五回に当たる。

楊家将を題材とした小説としては、他に熊大木『北宋志傳』（万曆二十一年〔一五九三〕序刊本など、全十巻五十回）があるが、本稿では主に、より古い内容を留めているとされる『楊家府』に基づくこととする。

2. 中鉢氏は、楊家将の小説のテキストとしては『北宋志傳』を用い、『楊家将』と略称している。本稿でも便宜上この略称を用いることとする。
3. 高島俊男『水滸傳の世界』（大修館書店、一九八七年）「十二遼国征討」参照。
4. 宮崎市定『水滸傳一虚構のなかの史実一』（中央公論新社、一九九三年）第三章「妖賊方臘」参照。
5. 劉忠については、『建炎以來繫年要録』巻十九の建炎三年（一一二九）正月丁亥に次のようにある。

山東盜劉忠號白氈笠，引衆據懷仁縣。…〔中略〕…忠自黥其額，時號花面獸。

山東の盜賊である劉忠は白氈笠と呼ばれ、多くの者を率いて懷仁県（山西省朔州市）を根拠としていた。…〔中略〕…劉忠は自ら額に刺青していたので、時に花面獸とも呼ばれた。

また、澤田瑞穂「彫青史談一中国における文身の種々相一」（『中国史談集』早稲田大学出版部、二〇〇〇年所収）も、楊志の青面獸という綽名が花面獸からヒントを得た可能性を指摘している。

6. 「昊天塔」と「破天陣」において、岳勝の綽名が花面獸となっている。「謝金吾」での綽名は雙刀。『楊家府』での綽名は花刀といい、手柄を立てるために楊六郎の軍に加わりたと思っていたが、王欽（雜劇における王欽若に当たる）の策略により楊六郎の指揮下には病人や老人ばかりが送られていたので、姜黄の汁を顔に塗って黄色くして軍に入り込んだという設定になっている。
7. 相田洋『中国中世の民衆文化一呪術・規範・反乱』（中国書店、一九九四年）Ⅲの第二章「紅巾考一中国に於ける民間武装集團の伝統一」の中で、『水滸傳』の英雄好漢のモデルとなったと思われる民間武装集團についてまとめられている。
8. 題目「韓延壽索戰賭三籌」、正名「楊六郎調兵破天陣」。主な登場人物は苗士安（楔子の正末）、楊景（第一折の正末）、岳勝、寇萊公（冲末）、呼延必顯、顔洞賓（浄）、胡祥、焦贊、孟良など。以下にあらすじを示す。

寇萊公は銅臺城において韓延壽の率いる軍によって包圍されていたが、ある夜に帝が不思議な夢を見る。陰陽臺官の苗士安に夢占いをさせたところ、汝州にいる楊景が危機を救ってくれるとのことであった。楊景は勝手に三関を離れた罪によって首を斬られたはずであったのだが、寇萊公は占いを確かめるために、呼延贊の子である呼延必顯を汝州へ向かわせ、楊景の罪を許して韓延壽を破らせようとする。〈楔子〉

韓延壽の軍師である顔洞賓は、宋の都を奪うために強力な天陣を布く準備をする。汝州では太守の胡祥が楊景をかくまっていたが、呼延必顯が楊景のことを尋ねても隠し通す。怪しく思った呼延必顯はとうとう楊景を見付け出し、銅臺城の危機を救うように命じる。楊景は以前配下にいた將軍達を集めることにする。〈第一折〉

楊景は岳勝、焦贊、孟良らと共に銅臺城の包圍を破り、城に入って寇萊公にまみえる。顔洞賓の布く天陣を見た楊景は、それを打ち破るべく諸将に命じて軍勢の手配をする。〈第二折〉

諸将の働きによって天陣が破られる。韓延壽は討ち取られ、顔洞賓は生け捕られる。〈第三折〉

楊景らは勝利を収めて凱旋する。寇萊公が酒宴を開き、楊景と諸将はそれぞれ官位を授けられる。〈第四折〉

以下、雜劇のテキストは、王季思主編『全元戯曲』（人民文学出版社、一九九〇・一九九九年）による。ただし、こちらで文字や句読点を改めた部分もある。

9. 『楊家府』では、第四巻第四則において呂洞賓と漢鍾離が仲違いをし、その後、呂洞賓は呂客と名乗って遼の軍師となり、漢鍾離は鍾漢と名乗って宋に協力する。「破天陣」においてもこの設定が意識されていると見るべきであろう。
10. 有澤晶子「元明雜劇に見る道情の演劇表現について」（『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』第三十四号、一九九九年）は「破天陣」について、神仙道化劇に見られるような現実への厭世観と道教への傾斜といった情動的要素は置き去りにされ、形骸化されていると指摘する。事実、「破天陣」は道教的要素を取り入れているとはいえ、中心となっているのは顔洞賓が布く陣を楊景が打ち破るという戦闘の場面である。

11. 原文は「説罷也欲待騰空，我歸去駕起青雲。你問我仙郷何處，説起來唬了三魂。栽花時則在頃刻，韓湘子和我關親。王祖師是我舅舅，馬丹陽與我緊鄰。張四郎釣魚我喫，張果老是我阿公。我則是藍采和身上的跳蚤，我則是漢鍾離腳上的蟻蟲。」

この中で詠われる人物の内、王祖師とは全真教の開祖である王重陽のこと。馬丹陽は全真教の第二代教主。それ以外は八仙のメンバーとされる者達であるが、張四郎は八仙に含まれない場合もある。張四郎についての詳細は、川野明正「天翔る犬一大理漢族・白族の治病儀礼「送天狗」と「張仙射天狗図」にみる産育信仰」（『鸞鏡』第八号、中国語文学会、二〇〇〇年）を参照。

12. 原文は「這天陣裏則不一個天陣，按着東南西北，前有朱雀，後有玄武，左有青龍，右有白虎。這四陣外，又擺八卦陣，乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌。這八卦陣，又按八門陣，是休・生・傷・度・景・死・驚・開。這八門陣外，又有二十八陣，按着二十八宿，角・亢・氏・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・畢・奎・婁・胃・昂・壁・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・軫…〔中略〕…正名曰是周天二十八宿陣，聚而爲一，散則計數，總一百四十二陣。」

13. 題目「楊六郎槍刺耶律灰」、正名「焦光贊活拿蕭天佑」。主な登場人物は黨彦進（第一折の正末）、焦贊（第二折・第三折・第四折の正末）、楊景（外）、孟良（外）、八大王（外）、寇萊公（外）、王樞密（浄）、韓延壽（冲末）、蕭天佑（外）など。以下にあらすじを示す。

宋朝に対し、遼の韓延壽から挑戦状が送られて来る。八大王が王樞密、黨彦進、寇萊公らと共に相談した結果、三関を鎮守している楊景を出陣させることに決まり、寇萊公が使者として三関へ向かう。〈第一折〉

寇萊公は楊景に元帥の印を授ける。楊景は配下の李瑜、張蓋、孟良、焦贊らと共に兵を率いて出陣する。〈第二折〉

楊景らが韓延壽の配下の将と戦う。楊景は耶律灰を槍で刺し殺し、焦贊は蕭天佑を生け捕り、李瑜と張蓋は耶律馬を生け捕る。〈第三折〉

楊景らが勝利を収めて三関へ戻ると、帝の命を奉じた寇萊公がやって来て、官位と恩賞を贈る。〈第四折〉

なお、「活拿蕭天佑」は『脈望館鈔校本古今雜劇』においてその出自を明記されていないが、前掲の小松謙「『楊家府世代忠勇通俗演義傳』『北宋志傳』一武人のための文学一」では、やはり内府本ではないかとしている。

14. 題目「公孫勝展三略六韜書」、正名「宋公明排九宮八卦陣」。主な登場人物は李逵（正末）、宋江（外）、盧俊義、呉用、公孫勝、羅真人（外）、兀顔統軍（冲末）、兀顔受（外）、李金吾（浄）、戴

眞慶（浄）など。以下にあらすじを示す。

遼の兀顔統軍の息子である兀顔受が配下の李金吾、戴眞慶と共に、宋に帰順したばかりである宋江らに戦いを挑む。宋の宿元景は、宋江を元帥に、呉用以下をそれぞれの役職に任じて遼を征伐するよう命じる。先鋒を決めようとする、李逵が名乗り出て引き受ける。〈第一折〉

宋江らは公孫勝の師である羅真人を訪ね、兀顔受に勝つ策を求める。羅真人は九宮八卦陣を伝授する。〈第二折〉

宋江らは羅真人の教えに従い、諸将の配置を決める。〈第三折〉
宋江らは九宮八卦陣を布き、陣に突撃した遼の軍は取り囲まれる。李金吾と戴眞慶は捕らえられ、兀顔受は敗走する。〈楔子〉

兀顔受は討ち取られ、李金吾と戴眞慶は首を斬られる。戦勝の宴が開かれているところへ宿元景がやって来て、宋江ら全員に官位と恩賞を与える。〈第四折〉

15. 原文は「(羅真人云) 宋將軍, 李逵去了也。我與你說, 明日兀顔受統軍必來, 我傳與你一陣。此陣你須得知, 未及貧道之傳授。名喚做九宮八卦陣。你九宮上安九個大將, 八卦上安八個英雄。公孫勝, 貧道另有秘法, 傳與您此陣變法。將軍, 你近前來。(做打耳暗科了)」
16. 原文は「(宋江云) 朱武軍師, 今日聚將, 要排一陣, 大破遼兵。軍師, 某與你計議, 擺一個九宮八卦陣如何。(朱武云) 哥哥此陣最高, 九宮分九九八十一宮, 八卦分八八六十四卦。(公孫勝云) 軍師說的是。此陣又有變法, 是天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇,

堪可破遼兵也。』

17. 澤田瑞穂「八卦教源流」(『國學院雜誌』第五十五卷第一号, 一九五四年)は、清代における邪教の一種である八卦教が、教徒中の有力幹部を地区に配し、震・離・坎などの八卦の名目を用いて管理させる八卦分掌法という方法を用いていたことについて考察しているが、その中で、『水滸傳』第七十六回や「九宮八卦陣」劇に見える布陣の描写が、八卦分掌法に対して間接的に影響を与えたのではないかと指摘している。
18. 原文は「(顔洞賓云) 忽里歹, 擺布的嚴整者, 着他打俺這陣者。(忽里歹云) 得令。(擺陣科) (正末唱)【快活三】“惡眼眼門旗前答話了, 鬧垓垓陣勢裏喊聲高。響瑤瑤喧天聒耳戰鑼敲, 忽刺刺助殺氣催軍砲。”(云) 楊宗保打那天門陣去。(楊宗保云) 得令。(打陣科, 云) 打了天門陣也。(韓延壽云) 軍師, 打了天門陣也。(顔洞賓云) 不妨事, 還有二十八宿陣哩。擺開青龍白虎陣者。」
19. 原文は「(兀顔受云) 您二將左右下攻, 某當先去。(李金吾云) 元帥, 俺殺將去來。(兀顔受・李金吾・戴眞慶做入陣科) (公孫勝搖旗科) (正末同衆圍住三人科) (兀顔受云) 可怎生東南西北不知了, 往那廂出去的是。(正末云) 兄弟每, 休着走了這廝也。(唱)【賞花時】“今日個難比交逢單戰爭, 則見他來往慌張無處行。你可也難敵俺衆雄兵, 你今日身亡在這地境, 這一陣衆人驚。”(兀顔受云) 這事不中, 我往空便處走走。(下) (衆做拏賊戴眞慶・李金吾科)」

The Stories of the Generals of the Yang 楊 Family and Shuihuzhuan 水滸傳： Comparison between “Potianzhen” 破天陣 and “Jiugongbaguazhen” 九宮八卦陣

Kinya TABUCHI

In the composition or person formation of Chinese classic novels, influential relations are often seen between works. The story of the Generals of the Yang 楊 Family is no exception.

The Story of the Generals of the Yang Family is often compared to Shuihuzhuan 水滸傳. In this paper, I summed up the contents of preceding studies and compared works which have same motif, the war against the Liao 遼 dynasty and special battle array, among Yuan-Ming 元明 dramas about Generals of the Yang Family and Shuihuzhuan.

First I summed up the contents of preceding studies, and tried to analyze and supplement them. Generally speaking, the opposition between the Beisong 北宋 dynasty and the Liao dynasty is one of the essential factors.

I then made a comparison between Yuan-Ming dramas about Generals of the Yang Family “Potianzhen” 破天陣 and about Shuihuzhuan “Jiugongbaguazhen” 九宮八卦陣. Special battle array is used in both dramas, but these are different in the contents of their array. In “Potianzhen”, the Liao army set up an array, and in “Jiugongbaguazhen”, the Lianshanpo 梁山泊 army did so. These are different in which ever set up the array, enemy or friend. “Jiugongbaguazhen” can easily assert a friend’s strength to an audience.

Moreover, “Potianzhen” involves the same military activities repeatedly, while “Jiugongbaguazhen” wins a victory in one battle. By avoiding lengthy repetition and showing victory at a stroke, “Jiugongbaguazhen” charms its audience.

Keywords : Story of the Generals of the Yang 楊 Family, Shuihuzhuan 水滸傳, Potianzhen 破天陣, Jiugongbaguazhen 九宮八卦陣, The war against the Liao 遼 dynasty